



オリヴィエ・メシアン(1908~92)

## メシアンの色彩感覚

佐野光司

読響は2017年11月、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン(1908~92)唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に常任指揮者カンブルランと挑みます(演奏会形式・全曲日本初演)。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載しています。第3回の今回は、メシアンが持っていた音と色彩の共感覚について、作曲に及ぼした影響とともに紹介します。(編集部)

### 色聴(共感覚)

メシアンは晩年に全7巻に及ぶ『リズム、色彩、鳥類学による作曲法』を著した。その第7巻第3章の冒頭で、次のように述べている。

「私は音楽を聴く時、いつもそれに対応する色彩が見える。また楽譜を(頭の中で音を聴きながら)読む時も、それに対応する色彩が見えるのであ

る」

実際メシアンにレッスンを受けたピアニスト木村かをりの話によると、この和音はもっと緑色にとか、紫色に弾いて、などの指摘を受けて非常に面食らったという。このように複数の知覚現象を「共感覚」というが、新生児は生まれて3か月くらいまで五感が未分化なため共感覚を持っているという説もある。

共感覚は意識的に起こせるものでは

なく、本人の意志と関わりなく起こる。そして共感覚の持ち主には様々なタイプがあるらしく、文字が色にとか、数字が色にとか等、対象が色に結びつく場合が多いようだ。中でも音から色が見える場合を「色聴」といっている。

メシアンの色聴はかなり具体的で複雑なものだ。『メシアン その音楽的宇宙』の中で、彼は次のように語っている。

「音楽を聴くと、音の複合体に相応する色彩の複合体が私の中では見えるのです」「私の諸和音は色彩です。和音は頭脳に色彩を発生させ、色彩は和音と共に進展するのです」。メシアンの音楽は〈アッシジの聖フランチェスコ〉に限らず色彩的だが、それは彼の色聴に負うところが大きいだろう。

### 色彩的な作曲家たち

メシアンは自分がそのような鋭い色聴の持ち主だったため、過去の作曲家についてもきわめて色彩的な音楽を作曲した例を何名か挙げている。何よりまずドビュッシーだ。ドビュッシーは「何色が好きか」と尋ねられた時、「スミレ色」と答えたという。メシアンはドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉、〈夜想曲〉の第1曲“雲”、ピアノのための〈映像I、II〉、歌劇〈ペレア

スとメリザンド〉などを挙げ、「どれもこれも色彩的で、和音の色彩への比類のない愛情を示しています」と述べながら、ドビュッシーの音楽には「何千という色彩」があるという。

ワーグナーでは楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉の「愛の二重唱」の場面には美しい色彩があり、楽劇〈神々の黄昏<sup>たそがれ</sup>〉の第2幕の導入部には黒ずんだ緑と陰鬱な紫色があるという。さらにムソルグスキーやストラヴィンスキー、ショパン等を挙げ、またモーツァルトについても「彼が色彩的である点が他の古典派の作曲家との顕著な相違」だという。

これに付け加えるとしたら、スクリャービンを挙げるべきだろう。交響曲第5番〈プロメテウス〉は色光ピアノなるものを開発して、音楽と共に様々な光を投影する。楽譜の最初のページには調(音)と色彩の一覧表があり、ハ調は真紅、ト調はオレンジ色等々である。

もちろん彼らに色聴があったか否かは不明だ。しかし、スクリャービンとリムスキー=コルサコフはお互いに、何の音が何色に見えるかを話し合っていたという記録がある。

### 〈アッシジの聖フランチェスコ〉の色彩

〈アッシジの聖フランチェスコ〉に

## 日本の弟子から見たメシアン

加古 隆

作曲家・ピアニスト



1972年頃、メシアンのクラス。前列左がメシアン、後列左が筆者

1971年、私はパリ国立高等音楽院で作曲を学ぶため渡仏しました。まず習いたい先生を探すが、当時作曲科の教授だったオリヴィエ・メシアンの名前は知っていても、一切の面識も紹介ありません。その頃はインターネットもなく、お

顔もよく知らないまま事務局で教えられた教室のドアをノックすると、先生らしき人が数人の生徒の傍そばにいます。私は恐る恐る「あなたはメシアンですか？」と尋ねました。「ウィ、先生は静かに応じ、事前のアポイントもない私に「作品を持って来たなら見ましょう」と、すぐその場でスコアに目を通し、「ぜひ、私のクラスにいらっしやい」とおっしゃって下さいました。

彼の授業で忘れられないエピソードがあります。居合わせた誰もが退屈するような生徒の譜面を見ながら、メシアンは一つ一つ注意点を示していきま。ところが、その生徒も負けてはいません。「ノン、ノン、先生！ 自分はどう思う！」と、引き下がらない。世界のメシアンに楯突くなんて有り得ない、と私は思いながら、先生が困りながらも決して怒ったり威張ったりせず、顔を真っ赤にしなが熱心に説明を続ける姿に、とても感動したものです。

また、時折外部から有名な作曲家を招いて講義を拝聴する機会がありました。ピアノに向かう作曲家、それを取り囲む学生達。そういう時も、メシアンはいつものように誰よりも早く教室に入ってピアノのすぐそばそばの椅子に座り、メモを取りながら熱心に耳を傾け、まるで学生のように質問さえするのです。現代音楽の巨匠と誰しも認める人が、何と真面目で謙虚なことか！ そんな彼が大好きでしたし、心から尊敬しています。

おける音色彩は編成において管弦楽の他、120人の混声合唱に加えて5群の打楽器、5種の鍵盤打楽器、3台のオンドマルトノなど、他に類を見ない多彩さだ。特に鳥たちの大合唱となる第6場（第2幕）は、初演を指揮した小澤征爾が楽譜を見るなり「演奏不可能」と言ったほど複雑だが、聴いているだけで万華鏡のように輝く。

メシアンは先の『作曲法』第7巻で、彼の音響パレットとして7種の旋法の他、組織的に構成された48種の固有な和音について、それぞれ詳細な色彩を記している。しかし、〈アッシジの聖フランチェスコ〉の音楽の様々な主題や場面が何色であるかは、私も含めて色聴のない人たちには分析によってしか分からない。

メシアン自身は有名な「移調の限られた旋法」の中で、第3番の第2移置形が「私の諸旋法の中で最良のものだと思っています」と述べているが、それは第1幕第3場で出てくる「天使の主題」で使われている。その支配的な色彩は「灰色と薄紫」である。

〈アッシジ〉の第1幕はヒバリの鳴き声で開始するが、これは『作曲法』第5巻によれば、ほぼチョコレート色とい

える。また、中心となる「聖フランチェスコの主題」は全体の音を総合すると、メシアンが構成した48種の固有な和音番号の12-Dの和音となる。それは「真っ白い雪の上で輝く金色の太陽」の色なのだ。この曲の中心となる人物に「輝く金色の太陽」の色彩を当てたところに、メシアンの聖フランチェスコへの想いが伝わって来よう。

メシアンは〈アッシジ〉の主題を15種挙げており、それはライトモチーフとも異なるが、曲の中ではそれに近い作用もしている。最初に歌われる僧レオーネの歌は「金と茶色」で始まり、トルコ石の青、緑と薄青色で囲まれたオレンジ色と変化する。これらについてそれぞれ色彩を記すことは可能だが、ここでは余地がない。

メシアンは〈アッシジ〉について「私が自分の音楽、和声や音の複合体やオーケストラに色彩を籠めておいても、聴衆には何も見えないのが残念です」と述べているが、私達は色彩は見えなくとも、その色彩的に輝く万華鏡のような響きの連続を聴くことはできるのである。

(さの こうじ・桐朋学園大学名誉教授)

今回は6月号に掲載します

心に残るクラシック

## 猪木武徳 ——④〈最終回〉

Takenori Inoki



## 中学生にブラームスは似合わない

## ブラームス:交響曲 第2番

好みを論じても無駄だと知りつつ、ブラームスの四つの交響曲のどれが一番かと話すようになったのは大学生の頃からだろうか。中学や高校時代に友人とブラームスについてアレコレ言い合った記憶はない。

LPレコードが中学生には自由に手に入らなかった頃、家の新築祝いに、オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア管弦楽団のブラームス交響曲第4番のレコードを父の友人からプレゼントされたことがあった。家にレコードが少なかったこともあって、このブラームスの「4番」を何度もかけたものだ。だが、ブラームスが心に沁みると感じた記憶はない。

中学生にとってのヒーローはルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンであった。同級生でレコードをたくさん持っていた少しませたS君が、土曜日の放課後、ブルーノ・ワルター指揮のベートーヴェン交響曲第6番〈田園〉の

レコード鑑賞会を音楽室で開いてくれたりした。60年近くも前のことだ。今と違って交響曲の生の演奏を楽しむ機会は少なかったので、音楽室の大きなスピーカーを凝視しながら聴き入ったものだ。

高校生になっても、クラシック好きの間でブラームスが話題になることはあまりなかったように思う。しかし、大学生になると好みに微妙な変化が現れた。わたしが学生だった頃の京都大学のオーケストラは、定期演奏会のプログラムにブラームスの交響曲をよく取り上げていた。特に第1番は、少し武骨な京大生が演奏すると、なにか格別な味わいがあった。京大オケのブラームス演奏がきっかけとなり、わたしはブラームスの室内楽や晩年のピアノ小品に強い愛着を覚えるようになった。「淋しき利他主義者」といわれるブラームス像に共感を覚えるようになったのである。

大学院生活を送った米国のマサチューセッツ工科大学は、理系の強い大学だったが、いい学生オーケストラを持っていた。そこでもブラームスが演奏された。心に残るのは、何といても交響曲第2番だ。冒頭のチェロとコントラバスの奏する簡単な3音の導入をホルンとファゴットが引き受け、そしてフルートとクラリネットが加わる第1主題のオーケストレーションは、いかにもブラームスだ。この第1楽章のコーダの *in tempo, ma piu tranquillo* からの数小節の「懐かしそうな」メロディーは、

モーツァルトとシューベルト一辺倒だったわたしに、音楽というものが天上の美だけではなく、この世の麗しさとも関わることを教えてくれた。

ブラームスの交響曲論議になると、わたしがこの「2番」を強く推すので、「へそ曲がりだ」と言う友人がいる。そして「2番」は、「1番」に比べると作曲技法の視点からも「劣っている」、などとケシカランことを言う音楽批評家もいる。人が「いい」と惚れ込んでおとしめるようなことを言っはならない！

この「2番」にはもうひとつ思い出がある。1989年ごろだったか、大阪で和波孝禧さんのヴァイオリン・リサイタルを楽しむ機会があった。ブラーム



ブラームス (1833~97) 自宅書斎にて

スもエルガーも、そして短いおしゃべりも実にノーブルで、爾来、和波さんの清潔で精神性の高い演奏の大ファンになった。後に和波さんの半生記『音楽からの贈り物』を読み、彼が江藤俊哉先生からブラームスのヴァイオリン協奏曲のレッスンを受けた時、「この曲のキャラクターをつかむためにブラームスの交響曲の2番を聴いてごらん」とアドバイスされたことを知った。「2番」の奥深さを知ったアドバイスだと感じ、自分の作品が褒められたかのごとく(?)うれしくなった。自由は孤独なものだと実感できる歳にならないとブラームスは心に沁みない。中学生にブラームスは似合わないのだ。

◆次号からは岸田繁さんです。

◎首席ファゴット奏者

## 井上俊次

Toshitsugu Inoue

フレーズを通して  
作曲家の想い伝えたい

「5月のプログラムでは、オンドレイ・レナルトが指揮する13、14日のプログラムに出演します」

東京芸大生の時、新星日本交響楽団に入団し、そこで指揮者オンドレイ・レナルトさんと何度も共演しました。人間的で温かい人です。1989年の定期演奏会でマーラーの交響曲第8番〈一千人の交響曲〉を演奏した時のことは忘れられません。彼にとって初めての大がかりな曲だったので凄く意気込んでいて、本番では最後の音が終わった後、彼は指揮台に突っ伏して号泣してしまいました。それを見て、僕らももらい泣きして感動的な演奏会になりました。特別な思いのある指揮者です。そんな彼との再共演をとっても楽しみにしています。

「曲はベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉とショパンのピアノ協奏曲第1番という名曲ぞろいです」

交響曲第1番、第2番がモーツァルトやハイドンの影響を感じるのに対し

て、〈英雄〉からベートーヴェンらしさが急に強まったと僕は思います。耳が聞こえなくなってきた葛藤や苦しみがあり、そこから内面の奥深いものがぐっとくる。木管で素晴らしいところは随所に出てきますが、終楽章の最後のクライマックスの手前あたりに、ピアノツシモでフルートとファゴットのユニゾンがあります。そこは前の時代の音楽にはなかったような、極限の悲しみを音楽で表現した聴きどころの一つだと思います。ピアノ協奏曲に関しては意外に知られていないのですが、ショパンではファゴットが活躍するんですよ。第2楽章にはソロピアノとファゴットの長いデュエットの部分が出てきます。ショパンはピアノを邪魔しない楽器としてファゴットの柔らかい音色を使いたかったのではないかな。

「井上さんは宮城県石巻市出身。実家は楽器店で、東日本大震災の時、津波を被り、ピアノ、ヴァイオリンなど楽器は全滅した。父親が海水につかったピアノの泥を洗い流して修復。『復活ピアノ』は石巻のシンボルにもなった」

実家が楽器店だったので、石巻中学校に入学した時、吹奏楽部のファゴット担当に決まっていたのです。二つ上の兄が吹奏楽部でオーボエだったの



で、弟の僕はファゴットだと。楽器は石巻中学校になかったけど、楽器屋の息子なら何とかしてくれるだろうと(笑)。中3の時、中学校始まって以来初めて全国大会に出場したのがいい思い出です。音楽の道の厳しさは何となく分かっていたので、音楽家になることは考えられなかったのですが、父のほうがり気になって、芸大附属高校を受けてみよう。石巻から東京まで当時片道6時間かかりましたが、レッスンに月2回通っていました。

「新星日響を経て、NHK交響楽団の2番ファゴット、コントラファゴット担当に。その後ミュンヘン音楽大学への留学が人生の転換点となった」

留学前は、音楽ってあれはダメ、これはダメという枠があるものだと思っていた。でも、留学してみたら日本の

スタイルと全然違う音楽表現が欧州には存在し、その自由さに驚きました。音楽の深さ、自由さを実感したんです。自分をもっと出したいという欲が出てきました。N響にいた頃、読響に何度か首席奏者としてエキストラで演奏し、その自由な音楽表現の雰囲気<sup>ひ</sup>に惹かれ、読響なら自分を表現できると思い、読響の首席オーディションを受けたいと考えるようになりました。

「読響には2006年に入団。演奏する時にどんなことを考えますか」

心掛けているのは、メロディー(主旋律)のひと区切りであるフレーズをどう捉えたら魅力ある音楽に聴こえるかを考え、それにプラスして自分なりの色づけをする吹き方です。留学して一番感じたのは、フレーズをベースにした音楽表現の大切さです。作曲家は、楽譜に強弱は書くけど、フレーズは書いていない。いろんな可能性があるが、その音楽を活かせるベストなフレーズを見つけていくのが音楽家としてやるべき一番大事なことかなと思っています。メンバー全員がフレーズで対話しながら音楽を形作っていくことが、僕としては理想です。楽曲の中で、和声と対話がうまく運べた時が音楽家として一番幸せを感じる瞬間ですね。その同じ瞬間に、きっと聴いている方々に音楽の素晴らしさが伝わっていると信じて演奏しています。

新鋭ブレンドウルフが〈シェエラザード〉で描く幻想的な物語

6/11 (日) 14:00 第97回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

6/13 (火) 19:00 第603回 名曲シリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈トゥオネラの白鳥〉  
ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲 第1番  
リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉  
指揮：ダニエル・ブレンドウルフ チェロ：宮田 大

※ 2017年度の名曲シリーズはサントリーホールの改修工事に伴い、4～9月は東京芸術劇場で開催します。



ダニエル・ブレンドウルフ

ウィーン国立歌劇場などで活躍する女性指揮者ヤングが初登場！

6/17 (土) 14:00 第198回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

6/18 (日) 14:00 第198回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲  
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 ブラームス：交響曲 第2番  
指揮：シモーネ・ヤング ヴァイオリン：ネマニャ・ラドウロヴィチ



シモーネ・ヤング

日下紗矢子がリーダーを務め、シューベルト〈死と乙女〉を演奏

6/19 (月) 19:30 第14回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》  
ショスタコーヴィチ（バルシャイ編）：室内交響曲 へ長調 作品73a  
シューベルト（マーラー編）：〈死と乙女〉（弦楽合奏版）  
ヴァイオリン：日下紗矢子（読響特別客演コンサートマスター）



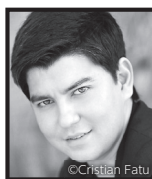
日下紗矢子

アルプスの大自然の夜明けから日没までを描いた大作を披露

6/24 (土) 18:00 第569回 定期演奏会  
東京芸術劇場コンサートホール

6/26 (月) 19:00 第17回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール(大阪)

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第3番 R.シュトラウス：アルプス交響曲  
指揮：シモーネ・ヤング ピアノ：ベフゾド・アブドゥライモフ



ベフゾド・アブドゥライモフ

※ 2017年度の定期演奏会はサントリーホールの改修工事に伴い、4～9月は東京芸術劇場で開催します。

# 6月 公演の聴きどころ

6月11日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》、13日の《名曲シリーズ》には欧州で注目を浴びるスウェーデンの新鋭ブレンドウルフが、読響に初登場する。リムスキー=コルサコフの交響組曲〈シェエラザード〉で名旋律を響かせ、『千夜一夜物語』の世界を表情豊かに描く。ショスタコーヴィチの協奏曲では、国内の若手ナンバーワンの呼び声が高いチェリスト宮田大が共演する。優れた技巧と多彩な音色を駆使して、傑作の第1番を切れ味よく仕上げる。

また6月後半は、ハンブルク国立歌劇場支配人を務めるなど欧州でキャリアを築いた女性指揮者ヤングが、初めて読響の指揮台に立つ。17、18日の《マチネーシリーズ》では、ワーグナー、ブラームスなど本格的なドイツものを指揮する。ウィーン国立歌劇場などでのワーグナー作品で高い評価を得ただけに、期待が高まる。セルビア出身の気鋭ヴァイオリニスト・ラドウロヴィチは、ロングヘアを振り乱しての情熱的な演奏で話題だ。ブルッフの協奏曲で圧倒的な存在感を放つだろう。

24日の《定期》、26日の《大阪定期》では、ヤングがR.シュトラウスの大曲〈アルプス交響曲〉で本場仕込みの腕を振るい、アルプスの日の出から日没までを描いた大スペクタクルを劇的に描く。前半は、ウズベキスタン出身のピアニストでロンドン国際コンクールの覇者アブドゥライモフが、プロコフィエフのピアノ協奏曲で最も人気が高い第3番を披露。美しくモダンな曲想でありながら民俗的な響きも聞かれる名品で、新星が見せる超絶技巧とみずみずしい音楽作りをお楽しみに。

よみうり大手町ホールの親密な空間（501席）で室内楽などをお届けする《読響アンサンブル・シリーズ》の今シーズン初回は19日。コンサートマスターの日下紗矢子をリーダーとする室内合奏団が、ショスタコーヴィチ（バルシャイ編）の〈室内交響曲〉作品73a、シューベルト（マーラー編）の〈死と乙女〉と、小編成作品の傑作を披露する。 (文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

“炎のマエストロ”小林研一郎が得意のチャイコフスキーを指揮

7/1 (土) 14:00 第199回 土曜マチネシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

7/2 (日) 14:00 第199回 日曜マチネシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲  
チャイコフスキー：交響曲 第3番〈ポーランド〉  
指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）  
チェロ：遠藤真理（読響ソロ・チェロ）



小林研一郎



遠藤真理

飯守泰次郎がワーグナーを振り、ピアノの巨匠フレイレが共演！

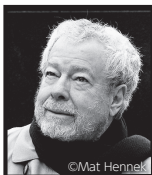
7/7 (金) 19:00 第604回 名曲シリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ブラームス：ピアノ協奏曲 第2番  
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈バルジファル〉から第1幕への前奏曲  
舞台神聖祭典劇〈バルジファル〉から“聖金曜日の音楽”  
楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行”  
歌劇〈タンホイザー〉序曲

指揮：飯守泰次郎  
ピアノ：ネルソン・フレイレ



飯守泰次郎



ネルソン・フレイレ

“古典派のスペシャリスト”が魅せるハイドン&ベートーヴェン

7/12 (水) 19:00 第570回 定期演奏会  
東京芸術劇場コンサートホール

ハイドン：歌劇〈真の貞節〉序曲  
ホルン協奏曲 第1番  
オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲  
トランペット協奏曲  
ベートーヴェン：交響曲 第7番  
指揮：鈴木秀美  
ホルン&トランペット：ダヴィッド・ゲリエ



鈴木秀美



ダヴィッド・ゲリエ

新世代の旗手・鈴木優人が振る〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉

8/20 (日) 14:00 読響サマーフェスティバル2017《三大交響曲》  
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉  
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉  
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉  
指揮：鈴木優人



鈴木優人

世界的巨匠ルイーゼが指揮する R. シュトラウス〈英雄の生涯〉

8/24 (木) 19:00 特別演奏会  
東京芸術劇場コンサートホール

8/25 (金) 15:00 特別演奏会  
横浜みなとみらいホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉  
ハイドン：交響曲 第82番〈熊〉  
R. シュトラウス：交響詩〈英雄の生涯〉

指揮：ファビオ・ルイーゼ  
※5月20日からチケットを発売します。



ファビオ・ルイーゼ

世界へ羽ばたく若手ソリスト3人が《三大協奏曲》で競演！

8/28 (月) 18:30 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》  
東京オペラシティ コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲  
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲  
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番  
指揮：海老原光  
ヴァイオリン：キム・ボムソリ  
チェロ：岡本侑也  
ピアノ：ダニール・ハリトーフ



海老原光



キム・ボムソリ



岡本侑也



ダニール・ハリトーフ

お申し込み・お問い合わせ  
読響チケットセンター (10:00~18:00/年中無休) 0570-00-4390  
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

## 読響×アプリコ 名作オペラと幻想交響曲

■ 6/3 (土) 15:00 大田区民ホール・アプリコ

指揮：現田茂夫

ソプラノ：森麻季 バリトン：甲斐栄次郎

ビゼー：歌劇〈カルメン〉から“前奏曲”“闘牛士の歌”

プッチーニ：歌劇〈ジャンニ・スキッキ〉から“私のお父さん”

ベルリオーズ：幻想交響曲 ほか

[料金] S ¥4,500 A ¥3,500 25歳以下 ¥2,000

[お問い合わせ] 大田区民ホール・アプリコ 03-5744-1600

---

## 東京二期会オペラ劇場 歌劇〈ばらの騎士〉

■ 7/26 (水) 18:00 東京文化会館 大ホール

7/27 (木) 14:00 東京文化会館 大ホール

7/29 (土) 14:00 東京文化会館 大ホール

7/30 (日) 14:00 東京文化会館 大ホール

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ

演出：リチャード・ジョーンズ

出演：林正子、妻屋秀和、小林由佳、加賀清孝、幸田浩子 ほか (26日、29日)

森谷真理、大塚博章、澤村翔子、清水勇磨、山口清子 ほか (27日、30日)

R. シュトラウス：歌劇〈ばらの騎士〉(原語上演・日本語字幕つき)

[料金] S ¥17,000 A ¥14,000 B ¥11,000 C ¥8,000 D ¥5,000 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

---

## フェスタサマーミュージザ KAWASAKI 2017

### 爽やかな風、シネマ&ポップス

■ 8/1 (火) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：渡辺俊幸 ※スペシャル・ゲストあり

〈サウンド・オブ・ミュージック〉メインテーマ

〈ひまわり〉メインテーマ

〈シエルプールの雨傘〉メインテーマ

〈ティファニーで朝食を〉ムーンリバー

〈ニュー・シネマ・パラダイス〉メドレー

〈スター・ウォーズ〉メインテーマ ほか

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000 B ¥2,000

[お問い合わせ] ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200